

独り占めしたくない？

Edward side

* 表紙 ナオズミ

Crowning Birth

http://www.geocities.jp/st_eternal_blaze/hagane/index.html

* イラスト らく … 9p 33p

落とし穴に落ちた

<http://www5.plala.or.jp/eco-raki/>

* イラスト みなも … 19p 61p

月の水 風の花

<http://mizuhana.sakura.ne.jp/>

* 漫画 しま … 44p 45p

J E S T

http://www.geocities.jp/andante_abba/

* 本文 直

てのひらのなか

<http://aledonly.web.fc2.com/>



なんであんなに見たがるんだろう。

くそ、と呟くように吐き捨てて、オレは左の親指の関節を噛んだ。

今年から査定の方法が少し変わるということで、軍に在籍している国家錬金術師はその説明を受けるために会議室に集められた。若造のオレは三組目。

二組目の説明が終わるまで、隣の休憩室で順番を待っている。みんなコーヒーを飲んだり、雑談をしたりしていたが、オレは一人壁際にあるイスに座って子供みたいに両足を抱え、アルフォンスのことを考えていた。

いや、正確にはアルフォンスのことではなく、アルフォンスがオレにしてくる、行為について。

昨夜アルフォンスにされたことを、思い返していた。

電気も火も落とされ、静まり返った深夜の家の中。

新月のせいで月明かりさえも差さない暗い部屋を、ベッドサイドランプの赤みを帯びた色がぼんやりと照らして陰影を作っている。

た。

夜の沈黙を裂くように、部屋にはオレの乱れた呼吸音だけが響く。

アルに聞かれるのも自分で聞くのも嫌で、なんとかこの呼吸を整えられないかと足掻いたが、無駄な努力にしかない。

絶頂が近くてますます呼吸は乱れ、どんどんオレの思い通りにならなくなっていく。

「……はっ…、あ……っ」

アルの手のひらがオレを追い上げてゆく。

追い詰められる。

本能的に腰を引こうと思ったがベッドの上では逃げられず、オレはアルの躰を押し遣ろうとした。でも腹が立つことに力では敵わなくて、しかもアルの手と唇とで躰の芯まで熱くされていて、もう弱々しい抵抗しか出来ない。

アルに縋り付いていた手を離し、両腕を交差させて自分の顔を隠した。

「……兄さん？」

全身がカタカタと震える。

「どうして隠すの？」

空いている左手で、顔を隠していた腕を引き剥がそうとする。

「顔…見せて……」

「…やめ…っ」

「見たいんだ。……見せて……」

「い…やだ……！」

オレを煽っていたアルの右手が、オレを戒めるためか、それとも不可抗力なのか、ぎゅ、と強くなる。
それでもなくても絶頂が近かった躰は、あつという間に熱を開放してしまった。

こんな、人が沢山いる場所で——昼間っから、アルの熱い吐息とか、肌の上を這う舌の濡れた感触とかまで鮮明に思い出してしまい、オレは居たたまれなくなって、両足を抱えた腕の中に顔を隠した。

顔が熱い。

ってか、なんであいつが側にいないこんな時にまで、一人で恥ずかしかつてなきやいけねえんだ。

だからしたくねえんだ。次の日が日勤のときは、特に。
あいつにとっては、ただの……なんてことない行為なのかもしれないが、オレにとっては毎回がいつぱいいつぱいの濃密な行為で、どんなに爽やかな朝がやつて来ても、躰は生々しく夜のことを覚えてるし、悲しいことに記憶も鮮明だ。

昨夜のことも、こんなにはつきり覚えてる。
全身真っ赤になっただんじやないかと思うくらい、羞恥で躰が熱くなる。

更に居たたまれなくなり、オレはぎゅっと両足を抱えている腕に力を込めた。

頑なに拒んだせいか、アルはいつも以上に執拗に、快感に溺れるオレの顔を見たがった。
なんであいつは、ああもオレのいろんなものを見たがるんだろう？

行為の最中に、よくじっと見つめているのを知っている。
肌を辿って……その、あ、愛撫、とか、してる最中にも、オレの躰をじっと見てる。

うなじとか、首筋とか、胸とか……し、下の、方、とか、いろいろ。それこそ、体中。

そんなの见ても、つまないだろうに。

胸はぺったんこだし、ウエストがくびれてるわけでもないし、シリだってぺったんこだし、その……なんつか、アルも、同じオトコなんだし、オレのなんて珍しくもないはずだ。

なのに、なんであんなに、じっと見てんのかな、あいつは。
オレが恥ずかしがれば恥ずかしがるほど、見ようとす。隠そうとすればするほど、暴こうとする。

オレのせいなんだろうか？
へんな顔するから、面白いか。でも押搦られてる感じはしない……。

それとも嫌がるのを楽しんでる？

いや、そういうことをするよなヤツじやないよな……。
わかんねえ。なんでだ。

そうだ、そういうえば、声、も。

声を聞かれたくなくて手で口を覆うと、それを引き剥がそうとする。

聞きたいとか、聞かせて、とかナントカ……。

「おいエド、どうした。具合でも悪いのか？」

熱でもあるのか、首筋真っ赤だぞ、と同じ国家錬金術師の男が声をかけてくる。男の声が大きかったので、なんだ腹でも壊したか、知恵熱か？と休憩室に居た他の奴等が揶揄うような口ぶりで聞いてきた。

オレは隠していた腕の中から顔を少しだけ上げて、赤くなっているだろう目元を覗かせた。

それまで騒がしかった室内が、しん、と静まる。

一人でスケベなことを考えてたから、きつとすげーヘンな顔をしていたに違いない。それともイヤらしい顔でもしてたんだろうか？

室内に、なんだか奇妙な静寂が落ちる。

オレは俯いて、また腕の中に顔を隠した。

この時、同じ三組目で説明を受けるために、ちようどアルが遅れてやってきたことに、オレは気づかなかった。

こういう時、アルはいつも声を掛けて来てオレの隣に腰掛けるのに、今日の説明会ではなんだか様子が違っていた。

オレとの間にひとつ席を置いて座り、一言も口を利かない。

むっつり押し黙ったまま表情を変えず、こちらを見ようともしない。

いや、説明会が始まった会議室の机に頬杖をついたまま、2、3度だけこちらへ視線を投げては寄越した。

目が合ったとき何か言いたそうにしていたが、まるでオレを非難するかのように眉を寄せると、ふいと視線を逸らす。

……オレの方こそ、眉間に皺を寄せたい。

何なんだ一体。お堅い公共の場だからこんな素っ気無い態度なのか？ それともオレのこと、なんかの理由で避けたいんだろうか？

それにしてはこのイスひとつ分の距離が微妙だ。本当に避けたいんならこんなイスひとつ分なんかじゃなく、もっと離れたところに座るはず。

オレはちらりと隣を盗み見る。

アルは頬杖を解いてイスに深く凭れて脚を組むと、腕も組んで正面を見据えていた。まるで目が合った相手をそのまま液体窒素並みに瞬間冷却しそうな冷ややかさだ。ただ盗み見ただけのオレまで寒くなりそうなそれに、ますます分からなくなる。

それは、この席ひとつ分の距離に何か関係してるんだろうか？
まるで誰かを威嚇してるみてえだな、なんて思って、ふと周囲
を見渡してみた。

すると他の、さっき一緒に休憩室にいた国家錬金術師たちが、
ちらちらとオレの方に視線を寄越しているのに気がついた。

なんだ？

訝しく思つて周囲の連中とアルの様子を注意深く見る。

オレに向けられる視線をアルが撃退しようとしている……よう
な？

つーか、なんでみんなオレを見てんだ。

この状況がほとんど理解できなくなり、混乱してくる。

オレ、なんかしたつけ？ それとも顔になんかついてんのか？

顔をあちこちゴシゴシ擦つてみたが、別ににかへんなものが
付いてる様子もない。

なんなんだよ、ホントに。

アルの液体室素光線にも挫けず、ヤロウどもは何度も何度もこ
つちに視線を投げて寄越す。

ふと、さっきの休憩室でのことを思い出した。

……ひよつとしてオレがさっき、スケベな、オモシロイ顔して
たからか？ みんな、笑つてるんだらうか？

いつもだったら「こつち見てんじゃねー！」と息巻くところだ
が、さすがに今回は出来なかつた。しかも隣にはオレにこんな思
いをさせてる張本人のアルが居るし。

ちくしょう、涼しい顔しやがつて。

昨夜オレに、あんなことしたくせに。

そのストイックそうな長い指で、触ったくせに。

クールそうな唇を這わせて、舌で舐めたりしたくせに。

……しつ、舌つて、舌つてなに考えてんだ。

そうじゃねえだろ、今は、査定の話を聞かないといけねえんだ。

へんなことを生々しく思い出してる場合じゃねえよ。

しかし小難しいことを考えようとすればするほど、オレは隣の
男のことを意識してしまう。顔が赤くなつていくのを止められな
い。

周囲がざわつく。査定の話をしている大佐の声だけが会議室に
は響いているが、気配のようなものが、静かなまま空気をざわつ
かせている。

他の連中が、見てる。

オレはとても顔を上げていられなくなつて、俯いた。

きつとさっき以上にへんな、オモシロイ顔をしているに違いな
い。みんなオレのそのへんな顔を見て笑つてる。

ちくしょう。

いつまで経つても慣れなくて悪かつたな。オレだつて好きで慣
れないわけじゃねえよ。出来ればアルみたいに平気な顔していた
いんだ。

弟のエルリック少佐は大人なのに、兄貴の方はどうせガキだよ。
わざわざ振り返つてこつちを見るんじゃねえや。

"Warning!"
Sinri no toбира
PING PONG
-dash ha
Genpou Shobun!

"The motto of
this week"
Itumo
niko niko
GENKIN
BARAI!

* ぬきぬき
* ぬきぬき
* ぬきぬき
ぬきぬき



ばさり、と頭の上に何か、ちよつと重いものを掛けられた。

少しだけ顔を上げてみると、それは明らかにオレよりサイズが大きい軍服だった。隣に目をやると、白いワイシャツ姿のアルがいる。つてことは、これはアルの軍服か？ わざわざ上着を脱いで、真つ赤になつているオレを隠そうとしてくれたんだろうか？

大佐、と静かだけどざわつている会議室に、アルのよく通る声が響く。

「中断させて申し訳ありません。エルリック少佐の具合が悪いようなので、途中退席しても宜しいでしょうか？」

「かまわんが……大丈夫かね？」

「私が保健管理局へ連れて行きます。さ、行きましょう、少佐」

戸惑っているオレの手を引き、アルはどんどん廊下を歩いていく。こつちは本当に保健管理局へ行く方向だ。

「ちよつ、ちよつ、待てアルっ」

「なんだよ」

「どこ行くんだ」

「保健管理局」

「オレ、別にどこも悪くねえぞ」

「うるさいよ」

にべもない。——怒つてんのか？

取り合えず手離してくんねえかな。廊下ですれ違う連中、みんな振り返るんだだけ。

連行されてる犯人に見えんのか？ いや、でもオレ一応軍服着てるし。

どつちにしろ居心地悪い。

ただどこういう時、アルは絶対に手を離さないと知っているので、せめて少しでも目立たないようにと頭から被っている軍服を取ろうとしたら、取るな、と強い口調で言われ、更に顔が隠れるよう目深に被らされた。

「……前、見えねえんだけど」

「だから手を引いてるだろ」

「いくらなんでも軍内では……」

「なんなら抱いていこうか？」

「……」

何を怒ってるんだ。今朝一緒に家を出たときはご機嫌だったのに。バス停でバスを待ってる時に、躰つらくない？ なんて耳元で囁いて、笑つてたくせに。

カラダ、つらいに決まってるんだろ。

あんなこと、何回もしやがって。

体中にアルの感覚が残ってる。まだ……つ、つながってる、カシジとかもするし。

いつもは使わない筋肉を使うのか、アチコチ痛いしよ。

あんな、ヘンな格好とか、させるからだ。

やややや、カ、カツコウつて、ちつ、違う。

オレもなに考えてんだ、勤務中だぞ？ ここ中央司令部だぞ？ 冷静になれ。

アルは自慢の弟だ。

兄ちゃんのおれが言うのもなんだが、出世頭だし、人当たりはいいし、鷹揚で穏やかで優しくて性格も……いいと思う。おれに対しては、時々鬼畜だが。

カッコイイと思う。

あいつが生まれたときからずっと一緒に居て、すっかり見慣れちまったおれにはイマイチぴんところないが、それでもいつもとは違う角度からみたアルとか、いつの間にと思いうくらい男っぽいちよつとした仕草とかを見せられると、おれは無駄にどきどきさせられてしまう。

見慣れてるせいでアルの容姿を「イマイチぴんところない」なんて言ってるおれが、それでもこんなふうにとどきどきするんだから、おれが思ってる以上にカッコイイんだらうと思う。

女の子にもてるのも知ってる。

アルが望めば、きつとどんな相手でも手に入れられるだろう。おれとは正反対の……可愛くて、素直で、笑顔とかも華やいて、なんかこう、死んだ母さんみたいにふわふわ柔らかくて、いい匂いなんかして、料理なんかも上手で、たとえば疲れたアルを芯から癒してくれる、そんな女の子。え、えっちとかも、きつとおれとするより、何倍も気持ちいいに違いない。

繋がるのだから……アルはおれを傷つけないように、出来るだけ痛みを感じないように、根気よく時間をかけて……ああいうこ

とをしたり、こういうの使ったり、とか、してくれるが、女の子相手だったらあそこまで気遣いする必要は、きつとない。おれに比べればもつともつと簡単なはずだ。

それでなくてもおれ、素直になれねえし、毎回嫌がるし。

なんでおれなんだらう。

たくさんの女の子が、アルに触れたいと、その腕の中に抱かれたいと願うの。

面倒くさいおれなんか抱くよりも、そっちの方が、いいはずなのに。

アルフォンスに握られている左の手首が、なんだかむず痒い。

離してくんねえかな、とちよつと抵抗してみる。

その手で、腕で、唇で、舌で……弟は、おれだけしか、抱かない。

おれだけしか抱かない、と言う。

あいつだって、生まれたときからずっと一緒に居るんだ、おれなんて見飽きてるんじゃないだらうか？

なのに、なんで見たがるんだらう？

なんで暴きたがるんだ。……なんで、もつともつと、と見たがるんだらう。

おれはなんでこんなに、アルに見られるのが恥ずかしいんだらう……。

更に赤くなつて体温が上がつたのを感じ取つたのか、それとも手を引かれるのを嫌がつたせいなのか、アルは立ち止まり、オレを振り返つた。

何か言われるかと思つたが、無言だ。

……呆れてんのか？

鋼の右手で頭から被せられた大きな軍服の端をそつと持ち上げ、アルを見上げる。

アルは黙つて見下ろしている。

オレの顔を見て少し目を見開くと、また眉を寄せた。

弟を見るために持ち上げた軍服をまた降ろし、自分の情けない顔を隠す。

アルは黙つてる。

……無言でじつと見んなよ、更に居たたまれなくなるだろ、と胸の中でつぶやいて、軍服を被つたまま俯いた。

掴まれていた手がほどかれる。アルが動く気配がした。次の瞬間、両足を掬われ、オレはアルの腕の中へと抱き上げられる。

「うわっ！ なっ、ななな……」

上半身も両足もがっちり抱きかかえられ、抵抗をする前に動きを封じられた。

軍服に包まれたオレの顔を自分のワイシャツの襟元へと引き寄せ、外部からの視覚を完全に遮断するかのようになり、強く強く抱きしめる。

「ア……アル……」

抱きかかえたまま、無言でアルが歩き出す。

視覚が完全に遮断され、聴覚が敏感になる。

さっきより状況悪いじゃねえかよ。みんな足を止めてる。ヒソヒソ話が聞こえてくる。

「誰？ 女？ 嘘でしょ？」と女の子たちの声。

「騒がれる割に女つ気なかつたみてーだけど、やるじゃねえか」と野郎どもの声。

アルがいま抱きかかえてるのが兄貴のエドワードだと知つたら、どんな顔をするだろう。同じエルリックでも、これだから兄の方は……なんて嘲笑されるだろうか？

——畜生。

一つ年下の弟にこんなふう抱きかかえられて、オレは更に恥ずかしくなる。

でも……そうだ、今のオレはアルのおかげで完全に外部から隠されてるんだつた。誰にも見られたり、しない。アルにも見られない。

だったら、いいか。

いまのうちに、盛大に恥ずかしがつておこう。

アルの束縛から開放されたとき、せめて平静でいたい。

こんなに軀をびったりくっつけて、アルの腕の強さとか、アルの匂いとかを感じた後じゃ無理だろうけど。

……本当に、無理かもしれんねえけど。

「先生、兄を預つてくれませんか」

ドアを器用に開けて、中の人間に声を掛ける。つつーことは、保健管理局についたのか？ 目の前が真つ暗で見えねえ。

「お。どうした？ ソレ兄貴か？」

知つてる声だ。いつも境遇が特殊なオレたちの健康管理面で世話になつてる医者。第3管理局に運び込まれたのかオレは。

ここには何度も来ているので、視界がなくてもなんとなく分かる。中に入って右に曲がつたから、こっちはベッドがある方だ。

「兄貴、どうかしたのか？」

「いえ、どうもしないんですが、僕が迎えに来るまで大人しく寝かせてやってください」

「なんだよ、サボリか？ ダメだダメだ、いい歳して」

「女の子紹介しますよ」

その一言で、コロリと態度を変える。

「なんなら終業まで置いていつていいぞ。診断書も欲しいか？」

「てめえ、それでも医者か！ 簡単に懐柔されてんじねえ！」

軍服の下から文句を言うと、医者は鼻先で笑う。

「俺は自分に素直なだけだ」

「そつちこそいい歳した軍医が何言つてやがる」

「いつまで経つても少年の心を忘れない男なんだ。なんならおまえが女の子紹介してくれんのか？ ん？」

言い返せずにいる間に、アルの腕の力が緩み、ベッドへ下ろされる。上着を取られてすぐさま毛布を掛けられた。そしてその上

から、またアルの軍服が頭に掛けられる。

「なっ、ちよっ…」

「顔を出すな、バカ兄」

「なっ…なんで」

「なんでじゃないだろ。僕が迎えに来るまで、頭冷やして大人しく寝てろ」

「………」

「先生、このまま兄が逃げ出さないよう見張つてくれますか？」

——それと兄が寝ている間、絶対に覗かないでください」

「なんだ、様子見るのも駄目なのか？」

「駄目です。絶対に覗かないでください。誰にも覗かせないでください」

まるで俺を隔離するかのようになり、カーテンをきっちり閉める。

「分かったよ。それよりおまえ、約束忘れんなよ」

「そつちこそ、くれぐれも守ってくださいよ」

頭に被された軍服を退けて起き上がり、オレはアルの気配を追つた。

コツコツという固い靴音が響く。出口へ向かいながら先生と言葉を交わし、戸を開けて、閉めして、廊下に出て……やがて足音が聞こえなくなる。

ベッドに突つ伏して、溜息をついた。

——疲れた。

血の気が上がるとこんなに疲れるものなのか？

自分の感情を制御できねえと軍人なんて勤まらねえだろ、しつ

かりしろよ、なんてわざとそんなことを考えて、意識を逸らす。アルが残していった軍服を、自分から頭に被せて毛布に深く潜った。

アルの匂いがする。

それと、仄かに石鹼の香り。

これは軍のシャワー室で使ってる石鹼の香りだろうか？　そういえば家の石鹼、そろそろ買い足しておかないと。タオルも補充しとかなきゃな。司令部の帰りに買おうか？　それとも家の近所にある店で買うか？

つらつらとそんなことを考えながら、オレはアルの匂いに包まれて目を閉じた。

「……兄さん？ 兄さん、起きて」

呼ばれて目を開けると、誰かがいた。

電気の光が眩しい。何度も瞬きして目を細めると、見慣れた顔が頭から被っていた上着をめぐってその下にいたオレを見下ろしている。

「……アル？」

背後に白衣を着た医者姿が見える。なんで、と思つて記憶を辿り、ここが保健管理局だということ思い出した。

両手を白衣のポケットに突っ込んで、アルに女の子を紹介してもらうと約束した医者は退屈そうにデカイあくびをしてる。

オレはそのそと起き上がり、少しだけ顔をしかめた。目ざといアルに、どうしたの、と聞かれる。

「いや、軍服脱がないで寝てたから、金具んトコとか、あちこち痛え」

少しずつ脳がクリアになってくる。

上着を置いて行つたアルは、もうすでに私服に着替えていた。室内に電気がついているという事は、もう外は暗くなっているのだろうか？ 本当に勤務時間の終わりまで、ちゃっかり寝ちまつた？

「やべえ、オレ…」

「大丈夫だよ、ちゃんと兄さんの上司にも言つておいたから」

「なんて」

「具合が悪くて保健管理局で横になってますって」

……別に具合は悪くなかつたんだけど。

「ぐっすり寝てたね」

「あー…、昨夜、あんまり寝てねえし……」

そこまで言つて、なんで昨夜あんまり寝てないのかを思い出し、ついでに寝る前に考えていた事まで思い出す。流石に寝起きでは一気に赤くなることはなかつたが、アルに見られると思つたらどんな顔をしていいか分からなくなり、どうやって不自然にならないように目を逸らそう、と照れながら困る。

昨夜あんまり寝れなかつたなんて、寝せてくれなかつた相手に向かつて、よくそんなあからさまなこと言えたな、オレ……。

アルがちよつと眉を上げてオレの顔を見る。でも次の瞬間、背後に目をやって医者姿を確認すると、不機嫌そうな顔をしてすぐさまオレの頭に、また自分の軍服を掛けた。

「な、なにすんだアル」

文句は無視される。

「じゃあ兄を連れて帰りますから」

「え？ ……あ、ああ」

戸惑うような医者の声。アルはオレを胸に抱き寄せると、ここに連れてきた時と同様に抱き上げた。

「アッアル？ ちよちよちよ……」

「先生、お世話になりました」

有無を言わさぬ強引さでオレを第3管理局から連れ出す。

さつきオレを起こしたときは、ここに連れ込まれる前に纏っていたトゲトゲしさはなかったのに。なんで急に復活したんだ。なにが癪に障ったんだ？

「ドコ行くんだよアルっ」

「家に帰る」

「ちよつと待て！」

「なんだよ」

「とにかく降ろせ」

「嫌だ」

「降ろせつてーの、このっ、降ろせつ」

動けないなりに足先をバタバタさせて身を振る。

最初は無視していたものの、しつこく抵抗したら大きな溜息と共に床に下ろされた。

頭に被っていた上着を取って文句を言おうと思ったが、アルが

真つ直ぐに寄越す目を見て急速に萎える。

「……と、とにかく、着替えてくるから」

「ロッカーに行くの？」

「お、おう」

「……わかった。じゃあ行こうか」

オレの背中を促すように押して歩き出す。

「おまえまで一緒に来なくていいよ、西口の門のところで待っててくれれば」

「ダメだ、今日はもう目が離せない」

「どーゆー意味だよ」

「自分で考えて分からないなら、家に帰ってから」

「家に帰ってから？ なに？」

「家に帰ってから、ゆつくり教えてあげるよ」

「……なんか、家に帰りたくないんですけど。」

隙を見て逃げようか？

「逃げてもダメだよ」

弟よ、兄ちゃんの心を読むな。

はあ、と溜息をついてロッカールームへと行く。アルは本当について来て、まるで監視するかのように離れない。後ろのロッカーに背を預けて腕を組み、オレを見てる。

「あー…、アルフォンス、くん」

「なんだよ」

「非常に、着替えにくいんですけど」

「どうして」

「どうして、つて…：そんなふうじーつと見られたら、誰だつて困るだろ」

「なに、いまさら。兄さんの体はもう隅々まで知ってるんだから、僕の視線なんか気にせずに脱いでよ」

「そんなこと言われて脱げるかつ」

涼しい顔をしているアルを振り返る。

「隅々とかいうな！ すつ、隅々まで知ってるんだつたら、なんでいつもいつもじつと見てんだよ！」

なに、とアルが眉を寄せる。

「昨夜だって、か、顔、みせて、とか言って、嫌だつったのに、無理矢理見たくせに！」

「兄さ」

「逃げねえから、おまえは自分の上着をロッカーに仕舞って来い」

せっかく貸してくれた上着を、今度はオレがアルの顔に無下に被せた。アルは無言で顔に被せられた上着を取ると息をひとつ吐いて、自分のロッカーがある場所へと消えていく。

——逃げよう。

オレは急いで軍服を脱ぎ、おざなりに上着だけハンガーに掛けると他はロッカーに適当に突っ込んだ。

ロッカーを閉めるためにポケットの中の鍵を探していると、「ようエド」と声を掛けられた。同じ国家錬金術師のヤツが2人、挨拶するように手を上げる。

「いま帰んのか？」

「おう」

「俺等ももう上がりなんだ。なあ、一緒に飲みに行かないか？」

「悪いな、急ぐんだ」

「そう言うなよ、たまには一緒に行こうぜ」

メガネを掛けた男が、オレの肩を抱くように腕を乗せる。

「なんだよ急に。オレと一緒に居るとナンパしづらいつて、前に言っただけじゃなかったか？」

「じっくり話したくなつたのさ」

「行かねえよ。急ぐんだ」

「奢るぜ？ ジョージの店のシーフードサラダ、食いたいって言ってたじゃないか」

「急ぐんだつーの。離せよ」

早くしないとアルが来るだろ。

ばん！と突然大きな音がして、オレたち3人は文字通り飛び上がる。

恐る恐る振り返ると、いつの間に戻ってきたのかオレの真後ろにはアルが立っていて、その長い指でオレのロッカーの扉を閉めていた。

ほらみる、来ちまったじゃねえかよ。